Shinkumi Bank
信用組合 しんくみ
ちかくにいるから、
チカラになれる。

エッセー（作文）募集

「私も見つけた、小さな助け合い。」

あなたの体験を

ストーリーにしてみませんか。

＼どなたでも応募できます／

第14回 小さな助け合いの物語賞

応募期間 2023年 6月1日(木)～9月8日(金) ※9月8日(金)必着

協　賛　全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後　援　金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

上位入賞作品は、パラパラ漫画による動画を制作。
「しんくみバンク公式YouTubeチャンネル」で
公開予定!

“しんくみバンク”信用組合は「助け合い」から生まれた金融機関。
この懸賞作文を通じて「助け合い」の心が広まることを願っています。

第14回「小さな助け合いの物語賞」エッセー（作文）募集

テーマ

実体験をもとにした「小さな助け合い」
- **誰かに助けてもらったときの感謝の気持ち**
- **助けたことで得られた豊かな心**

（家族や友人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります）

文字数

800～1200文字（原稿用紙2～3枚程度）

応募期間

2023年6月1日(木)～9月8日(金)
※9月8日(金)必着

応募方法

- 郵送・メール：専用の応募用紙を作品と併せて応募ください。
- 応募フォーム：専用サイトより直接応募ください。

※応募要項・応募用紙・応募フォームは応募サイトに掲載しています。

郵送・メールによる応募の際は、必ず応募用紙を添付してください。

応募先

郵　送　〒105-7208　東京都港区東新橋1-7-1　汐留メディアタワー 8F
「小さな助け合いの物語賞」応募事務局

メール　tasukeai@shinyokumiai.or.jp
メールタイトルは「助け合い応募」としてください。

賞の種類

作品賞	しんくみ大賞	最優秀賞 **1編／賞状・副賞（商品券20万円分）**
	しんくみきずな賞	優秀賞 **1編／賞状・副賞（商品券10万円分）**
	未来応援賞※	青少年を対象に、今後の人生のプラスとなるような出会いや助け合いを描いた作品 **2編／賞状・副賞（図書カード5万円分）** ※未来応援賞は、18歳以下（2024年3月31日時点）に贈られる賞です。
	ハートウォーミング賞	助け合いから生じる人に対する思いやり、やさしさが感じられる作品 **10編／賞状・副賞（商品券1万円分）**
学校賞	徳育奨励賞	応募数の最も多かった学校 **1校／賞状**

選考・発表

審査結果は10月中に主催社ホームページにて入賞者の作品・氏名・学校名を発表します。上位入賞者は10月20日（金）に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。（徳育奨励賞も含む）

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により表彰式を中止する場合があります。

注意事項　応募要項の注意事項をご確認のうえ、応募ください。

主催　一般社団法人　全国信用組合中央協会

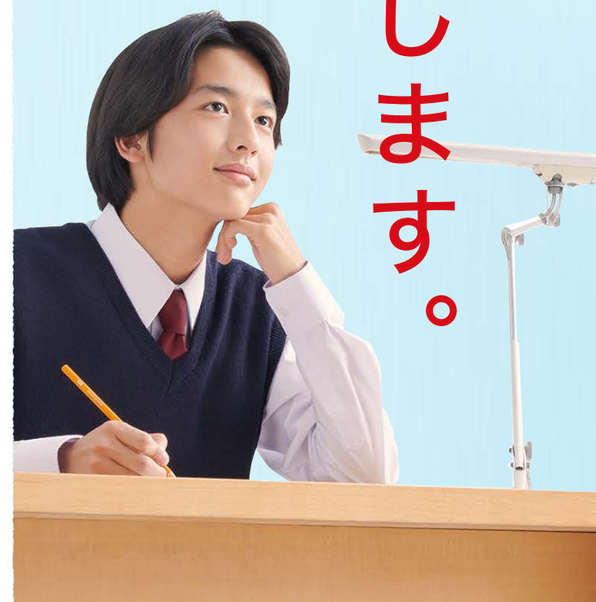
協賛　全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援　金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

一般社団法人
全国信用組合中央協会
応募サイトはこちら

物語をあなたにお届けします。

昨年の受賞作品2編をご紹介します。
誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、あなたの心を温めてくれたなら、
次はあなたの「物語」を届けてください。



しんくみ大賞

近所の定食屋

松川　理沙

「元気のいい挨拶だね」
そう褒めてくれたのは、登下校で必ず通るところにある定食屋のおばちゃん。私がまだ小学生の頃、朝と夕方に外に出てきてくれて私たちを見送ってくれていました。そこの定食屋さんは、入り口に貼ってある紙がとても有名なお店でした。その貼り紙にはこう書いてあります。
「こどもたちへ。おうちにごはんがなかったり、ひとりでたべるのがさみしいとおもったらいつでもみせにおいで」
ある日、親からご飯代として千円を渡されました。親はすぐに仕事場に戻り、一人でご飯を食べに行ったことがない小学生の私は、どうしようかと悩んでいました。そこで、あの貼り紙、いつも挨拶をしてくれるおばちゃんの顔が浮かびました。私はその定食屋まで走り、ドアを開けました。
「おお、りさちゃん。こっちに座んね。」
と、事情も聞かずに席に通してくれました。待っていると、おばちゃんがあったかいお味噌汁とご飯、チキン南蛮を持ってきてくれました。
「一緒に食べよう」
と、隣へ座り学校の話や家族の話などいろいろな話をおばちゃんは楽しそうに聞いてくれました。私は一緒にあったかいご飯を食べられることがうれしくて仕方がありませんでした。その日から、私はだれよりも大きな声で挨拶するようになりました。あの日に食べたご飯を一生忘れることはありません。
中学生になってから、母が再婚したこともあり、隣の県へ引っ越しをしました。いま、その定食屋さんは続いているのかもおばちゃんが元気に暮らしているかもわかりません。あの日、おばちゃんに救われたことで私の人生が大きく変わったことは言うまでもありません。
今、私は定食屋さんを経営しています。あの定食屋さんのように全く同じ貼り紙を貼り頑張っています。私と同じような境遇を持った子供たちが食べに来てくれます。立場が変わり、おばちゃんはこういう気持ちだったのかと気づくことがたくさんあります。当時は、なぜ知らない子供にご飯を提供しているかわかりませんでしたが、今ならわかります。「おいしかった。ありがとう」「またたべたい」などの純粋な子供の心に触れることができ、うれしくて生きがいになっているのです。私は、ご飯を提供した子供たちにはいつもこう言っています。
「お代はいいから、困っている人がいたらたすけてあげてね」と。

しんくみきずな賞

お弁当についているメッセージ

迫田　彩夏

二〇二二年八月某日、私は今、コロナウイルスに感染し、一人ホテルで療養中である。ここは、日中でも電気がないと部屋は真っ暗で窓も開かない。日に日に体調は良くなっている安心感はあるものの、少し残る症状や、後遺症への不安に押しつぶされそうになる。もちろん、病気自体の辛さはある。しかしそれよりも、人に会うことや話すことのできない孤独感からくる辛さの方が勝っているような気がする。何とも言えない気持ちになるのだ。

しかし、たった一つだけ、ここでの楽しみがある。それはお弁当に割りばしを固定するためのシールに描かれている励ましのメッセージを見ることだ。メッセージも多種多様である。お弁当を仕出ししてくださる会社のスタッフの方々からのもの、書道部の高校生がアートを交えて描いたことわざや、中には、小学校一年生の女の子が、たくさんのイラストを添えて書いてくれたメッセージもある。その一枚一枚を私は部屋の見えるところにきれいに飾り、くじけそうなときや不安なときにぼーっと眺めていると元気が出てくる。コロナになんか負けてたまるかと強い気持ちになることができるのだ。ホテル療養について色々な話を聞いたことはあったが、まさかこんなサプライズがあるのだなんて想像もしていなかった。私は今、顔も名前も知らない人たちからたくさんの元気をもらっている。本当は直接会って、一人一人にお礼を言いたいと思うが、それは難しいだろう。この場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。
私は今、新しい形での親切を享受しているのだと思う。人と人が直接関わる形で生まれる親切は、今までもよく経験してきた。しかし今、ここに飾られている一つ一つのメッセージを描いた人々は、見えない誰かのことを思い、読んだ人が少しでも元気になるようにと願いを込めて描いているのだと思う。たとえ直接、
「早く元気になってね。」
と言われなくても、この一枚のシールに描かれたメッセージからは、まるで直接励ましの言葉をかけてもらっているかのような温かさが伝わってくる。心のこもったこの優しいメッセージの一つ一つは、こんな状況の中でも私に、誰かとつながっているのだ、私は一人ではないという安心感を与えてくれる。見えない誰かを思う優しさ、またそれを享受できることの喜びを知ることができたという意味では、この経験も全てが無駄ではなかったように思う。
現在時刻は十七時半。夕食の配布を知らせる館内放送が流れる。
「今回は誰からのどんなメッセージがついているのかしら……」
わくわくしながら部屋のドアノブにかけられたお弁当の袋を手に取る。

他入賞作品はこちらをご覧ください